

## 『博多小女郎波枕』の周辺

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 橘 英哲  |
| 雑誌名 | 筑紫女学園大学紀要   |
| 巻   | 17  |
| ページ | 15-25   |
| 発行年 | 2005-01-01  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000919/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000919/</a> |

# 『博多小女郎波枕』の周辺

橘 英 哲

Related Themes of the *Hakata Kojorō Nami makura*

Hideaki TACHIBANA

平成十一年六月の博多座開場は福博の演劇ファンにとっては、近来稀な慶事であった。特に柿落しに上演された「元船」は、あのセットが組めるような劇場が欲しいというのが、願いであっただけに、飛び立つ思いで観たものであった。

平成五年五月、この原作である『博多小女郎波枕』が、東京の国立劇場で前進座によって、通し狂言で上演されたことがあった。これは、なるだけ近松門左衛門の原作に近い形での上演を意図して企画されたもので、中の巻「心清町」などは、珍しくまた面白いものであった。しかしそれでも、上巻「元船」は歌舞伎の定番の演出であった。盆に乗って大きく正面に回る元船のセットを観ながらこれを博多で観ることを夢見たものであった。

原作の『博多小女郎波枕』については、かつて書いたことがあるが、<sup>1)</sup>書き残しのこともあるので、これは再度記す小文である。

江戸浄瑠璃の一つである土佐少掾橘正勝に『博多露左衛門色伝授』という正本がある。上演年代は未詳であるが、後述するように延宝七年（一六七九）以前であることはほぼ間違いない。『博多小女郎波枕』が享保三年（一七一八）上演であるので、それに先立つこと四十年ほどである。本書は『新群書類従第五』に早く翻刻されているが、ここでは『土佐浄瑠璃正本集第一』（角川書店刊）により、原文には適宜漢字を補った。

九州において博多露左衛門光次と名のり、あめ若みこの子孫として朝日長者とせうぜられ、七珍万宝世の樂しみ一つとして不足ない。主人公が『大海知らぬ井の蛙』と笑われるのが口惜しいと、諸国をめくり色里に遊び、くもる心の鏡をみがきたいと思立ち、船を造り蓬萊丸と名づけて船出をする。そこに鰐のばんこすい王とその子鰐の大八という悪党がからみ敵対する。都や江戸の色里での豪華な遊びと、悪党たちとの修羅場がないまぜになつた古浄瑠璃らしい物語である。特に、土佐浄瑠璃は節事や景事が多く、音楽的にも華やかなものであり、この作品にもその特色がよく表れている。

この作品については、早く若月保治氏の『古浄瑠璃の研究第四』に解説があるが、それによれば、西鶴の『好色一代男』の模倣であり、『源氏物語』の真似らしいところもあり、また、道行などは全く、『十二段草子』の東下りを真似ているとある。ただ、『一代男』については、この『色伝授』（以下色伝授と略称）の方が先行しているようである。平成十二年刊行の武井協三氏の『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』に紹介された『弘前藩庁日記』には、当時の大名屋敷における芸能上演の様子が書き留められているが、この延宝七年のところに五月七日、同十三日の二日にわたって「はかた露左衛門 上るり相撲」という狂言番組が記録されている。この上るり相撲というのは、京嶋原で遊女を左右二手に分け、色相撲と称して相撲を取らせるにぎやかな節事の場面のことである。土佐浄瑠璃

は前述したように全体的に節事の多い浄瑠璃であるが、それらを集めた段物集『蘭曲千代竹』にも、道行など『色伝授』のその他の節事とならんで、「色里女郎すまふ」としてとられている。役者名からみれば、おそらく歌舞伎で上演されたものよつであるが、大名屋敷の座敷歌舞伎として、人気のある演目だったのであつた。したがつてこの『色伝授』は延宝七年以前の作であると推定できる。『好色一代男』が天和二年（一六八二）であるので三年以上前といつことになる。しかし、『一代男』も『源氏物語』のパロディである。この『色伝授』も『源氏物語』になぞらえた、ある一人の男の近世風色模様であるとすれば、似ていても不思議ではない。

ところで、博多露左衛門といつ人物の造型には、中世から近世にかけて活躍した博多の豪商たちの面影が、色濃く反映していることは間違いないであらう。古代から中国・朝鮮などに向かつて開かれ繁栄した博多を拠点に財を成した、神屋宗湛・島井宗室など。さらには密貿易などで刑に処せられた伊藤小左衛門・末次平蔵などである。伊藤小左衛門の朝鮮密貿易が発覚し一族ともども処刑されたのが寛文七年（一六六七）、末次平蔵茂朝が投銀を行い闕所となつたのが延宝四年（一六七六）のことであつた。この『色伝授』が上演されたのとはほ同じ時期である。

『博多小女郎波枕』（以下波枕と略称）の毛剃九右衛門の造型についても、これら博多商人たちのイメージが投影されていることは間違いない。<sup>(2)</sup>ただ私は『波枕』上演までの時間の隔たりが気になっている。末次平蔵は博多出身であるものの、事件は長崎で起つたことなので一応おくとして、伊藤小左衛門の事件から『波枕』上演の享保三年までおよそ五十年が経過している。影響関係が間違いないと思われるだけにやや気になるところである。私はこの間をつなぐものとして、『色伝授』の博多露左衛門を想定したいと思つている。

『色伝授』は、前述のように延宝七年以前の上演であるが、その後も歌舞伎では上演されていたよつである。寛保三年（一七四三）刊の歌舞伎評判記『役者和歌水』（岩波書店、役者評判記集成第二期第二巻所載）の花川座、津内門三郎の条に次のよつな文がでてくる。

『其後奴六十郎殿を敵の廻し者としり、髭を剃と云い近寄所を、取て投鏡にての打擲、まへと露左衛門に小四郎殿致されし格できました』

小四郎とは坂田座の榊山小四郎のことであるが、小四郎が以前に露左衛門を演じた時と同じような芸の格で、門三郎がこの狂言を演じたといっているのである。鏡にての打擲は『色伝授』に同じ場面がでてくるわけではないが、似たところはあるので、歌舞伎で演じた際にこの狂言と同じように演出されたのかもしれない。他に実例を探し得ないが、このように『波枕』上演の後まで、『色伝授』が歌舞伎では演じられた形跡がある。近松の毛剃の造型になんらかの影響を与えることはできなかったのではないかと思つている。

もちろん近松の毛剃は露左衛門と同一ではない。露左衛門に敵対する役の鰐のばんこずい王は『かいぞく山立ひるがんどう』、人の宝をりふじんにうばう『悪党であるが、そうした悪人のイメージも毛剃にはある。現代の歌舞伎の毛剃の型は、幕末に近く初代浅尾為十郎、初代仲村仲蔵、七代目市川団十郎らによって工夫されたといわれている。そこまでの影響を云々するわけではないが、少なくとも『色伝授』という作品は無視できないようである。

さらにこの『色伝授』の冒頭部分であるが、発端は新造された船蓬菜丸の場面、増ほの助、萩之丞といった家来と乗初をして沖に漕ぎ出す。そこにあとから小船三丁が漕ぎ寄せて来る。人々があやしんで船をとめてみると、それは長崎丸山の遊女いこく、わこくという二人であった。露左衛門は喜び二人と酒を酌み交わし、二人を身請けするため博多へいそぐ。そこにその身請けを邪魔しようとして、先のばんこずい王の手下がやって来て争いとなる。ざつと以上のような第一幕である。『波枕』の上巻は、関門の沖に毛剃の船が停泊している。折から乗り合わせていた小町屋惣七と毛剃たちが、世間話をして酒を酌み交わしたところに、早船がやって来て密輸の品の受け渡しをする。それを見ていた惣七と争いになり、惣七は海に落とされる。「元船」の場である。さらに次の「奥田屋」では、毛剃が惣七を味方に引き入れ、小女郎ら遊女たちを金に飽かせて身請けをする。登場人物は異なるが、人の出し入

れや場面の設定がよく似ている。確証はないが、なんらかの影響がありそうである。

『博多露左衛門色伝授』は現在一般的にはあまり知られていないが、色遊びの華やかさ、修羅場の勇ましさ、それらをつなぐ賑やかな節事と、変化に富んだ面白さがあり、当代では結構喜ばれていたようである。『博多小女郎波枕』を考える時、一応視野に入れておかないといけない作品だと思っている。

## 二 『あびす講結御神』について

近松の世話物浄瑠璃二十四編の第十作目、『丹波の与作待夜の小室節』の中の巻「関の旅籠屋の場」の冒頭部分に次のような文がでる。『色こそ道の関の地蔵、白子屋の左次が内、小まん、小女郎、小よしとて、百二十里先の江戸にまで名の通った三人の客引きの旅籠女である。いわゆる出女・飯盛女のこと、客引きの他、色を売ることもあるのだが、ここに小女郎という名が出てくる。』

小女郎という語は、一般には普通名詞として使われ、少女の意である。しかしここでは、小まん・小よしと同列に使われ、明らかに登場人物の名前となっている。そしてせりふが与えられ、関の宿場の賑やかさを表現する役割になっている。なお、小まんは主人公の与作の馴染みの女であり、この後ストーリーに大きく関わる主役の一人であるが、他の二人はこの場だけの登場人物である。この作品は歌舞伎にもとられ、多くの書き替え狂言を持っている。『恋女房染分手綱』などがよく知られた作品であるが、これにも、この小女郎は出てくる。場面冒頭の気分変わりに適当な役柄だったのであろう。安永頃上演と推定される『恋女房染分手綱』の歌舞伎台帳には、第七大切の冒頭で、賑やかに客を呼び込む小女郎のせりふが記されている。同じ時の狂言番付には、おじゃれ小女郎とある。

近松のこの『丹波与作待夜の小室節』（以下小室節と略称）の原拠は定かでないが、それ以前の歌謡によって伝

承されてきた人物だったようである。これを最初に歌舞伎にとりあげたのは延宝五年（一六七七）で、嵐三右衛門の丹波与作であったという。近松の『小室節』が宝永五年（一七〇八）と考証されているので、およそ三十年前である。その後も歌舞伎では上演されていたが、これら歌謡や歌舞伎を参考にして、近松は自身の作品を書いたのである。それゆえに近松の『小室節』も、浄瑠璃ではあるものかなり歌舞伎的であり、この頃近松が書いた浄瑠璃作品とは、かなり趣を異にしている。したがって、歌舞伎への転用もすぐに考えられ、また容易であったのかもれない。そういう理由もあつてか、同じ宝永五年に『小室節』を書き改めた『えびす講結御神』（以下結御神と略称）という芝居が、この年の顔見世として、京都夷屋座において上演されたのであつた。

そこでその『結御神』であるが、下の巻に博多小女郎という遊女が登場する。下の冒頭に『ちくぜんのはかた小女郎のしゃれ姿』と揚屋入りの姿が描写されている。強くストーリーに関わっていく役どころではないが、小石・小山三という姉妹の敵討ちの味方として活躍する、義侠に富んだ人物という役である。演じたのは、番付によれば山下亀之丞という若女形であつた。この狂言本の脇方簽に座本夷屋松太夫、立役山下京右衛門など五人の名があがっているが、その中に太夫山下亀之丞とある。当時の歌舞伎評判記にも頻出する美貌の人気役者であつた。宝永八年（二七一一）刊の歌舞伎評判記『役者大福帳』（岩波書店、役者評判記集成第四巻所載）の江戸の部に『上上吉』と評され、次に『近年京で日の出の若女、卯の顔みせ中村座がお江戸初ぶたい』とある。人気があつたのでこの年初めて江戸の芝居にも出たのであつた。もつともこの時は、芝居そのものの出来がよくなかつたようで、『仕組が不出来ゆへ思ふ程当り見へず、お江戸風をのみみ込給はゞ上手のまとであたるは今の事』と期待されている。

原作にはない博多小女郎という人物を設定し、当代の人気役者山下亀之丞をこれに当てたのは、この役どころに歌舞伎風な見せ場を期待してのことだったにちがいない。現存するこの狂言本は、東京芸術大学が所蔵する絵入狂言本であるが、その絵の部分に『はかた小女郎道中 かめの丞大でけ』とあり、さらに別の絵にも『はかた小女郎

はら立る かめの丞大でけ」とある。この狂言本の内題下に「顔見せ大あたり」と記されていて、全体としても当たった芝居だったのであるが、このような趣向もあずかつて力あったのであろう。

ところでこの『結御神』が上演されたのは前述のように、宝永五年（一七〇八）のことであった。近松の『波枕』の上演が享保三年（一七一八）なので十年前のことである。周知のごとく、博多小女郎の名はこの頃すでによく知られていた。多くの先行文献がそのことを示していて、種々のイメージが語られているが、その一つ、西鶴の『好色一代男』巻五「当流の男を見しらぬ」の昔は博多小女郎と申して冠着者ありける。人の命を取て袖の湊の大きはぎよりこのかたは、のイメージが一般的なものであつたと思われる。かぶきものとは、華美な風体の伊達者といつぐらゐの意味であり、『大騒ぎ』の事件は未詳であるが、なにやら勇ましいイメージも加わるようである。『結御神』はこのように、近松の原作である『小室節』のなんでもない登場人物、旅籠屋の出女小女郎の名前から連想して、博多小女郎といつかぶきものを登場させたと私は思っているが、それが、浄瑠璃を歌舞伎化する際の趣向というものであろう。またそれは、一座の役者を格に応じて配置しないとイケない、歌舞伎の宿命というものであるのかもしれない。前述の脇方箴には、他に太夫津川半太夫、立役沢村長十郎の名がみえるが、それぞれ前半の主役である乳の人重の井、馬方丹波与作の役が配されている。山下亀之丞もふくめて残り三人は、下の巻の登場人物に配されているのである。下は原作にはないが、それが歌舞伎化なのである。かくして『波枕』とはずいぶんちがうイメージの博多小女郎が、近松以前に出現していたのであつた。

### 三 博多小女郎忌について

小原菁々子編『定本西日本歳時記』（西日本新聞社刊）の十一月に「博多小女郎まつり」という項があり、以下



の句が収録されている。

柳散る夕暮なれや小女郎忌

ともる灯は博多の町よ小女郎忌

小女郎忌廓に近き千鳥橋

作者は三句とも秋本善次郎という人である。この季語については詳しいことはわからないが、解説には『博多柳町に小女郎の碑があり、十一月、小女郎まつりが行われていた』と書かれている。一句目の『柳散る』はその柳町のイメージであろう。二句目は小女郎忌よせて博多の郷愁がにじむ佳句である。三句目の廓は千鳥橋に近いとあるので、石堂川沿いの元の柳町をさしている。私は千鳥橋に千鳥足をかけているのではないかと思っている。元柳町に近いだけであれば石堂橋であろうから、千鳥橋と表現したことに意味がありそうに思うのである。深読みかもしれないが、そう考えれば、夕暮れに催された小女郎忌を終え、灯りのともった博多の町をすっかり酔って、千鳥足で歩く姿がみえてくるようで面白い。

秋本善次郎さんは残念ながらご生前に面識を得ることはできなかったが、かつての夕刊フクニチの社長を勤められた方である。ご家族の話によれば、文学や芝居に造詣の深い風流人であったよし、しばらく福博の名物であった名土劇の常連でもあった。福岡の演劇シーンに折々お名前をみかけた記憶がある。

秋本さんが、升木有三という筆名で『博多商人盛衰記』という連載をされたことがある。中世から近世を経て明治大正にいたる、博多商人の興亡の物語である。その二十八回目は「豪快と小心翼々と 近松の傑作博多小女郎」と題されている。中に毛剃の説として『毛剃の一説には竹田秋楼氏（福岡日日記者「南国物語」）のザンギリ頭がある。密貿易者は異国に押渡ってゆくためチョンまげを切っていたから毛剃というのである』という説を紹介しておられる。人別帳から姓を削られることという従来の説と比較して、どちらがよいかかわらないと言っておられる

が、面白い説である。タイトルについては、近松は（略）密貿易特有の心理、すなわち豪快と小心翼々の両面を見事に浮き彫りにして、人間と時代を描いている点が、この一作を不朽の名品たらしめている。と書いておられる。小心翼々とは、上巻奥田屋の幕切れて科人の客改めが行われるというので、それまで物に動じない豪快な首領ぶりを見せていた毛剃が、急に狼狽して小心さをあらわすくだりのことである。いわば気分転換の場面だが、毛剃の人間の一面がよく表現されているということであろう。

この連載で、氏は「神屋宗湛」についても書いておられるが、宗湛の愛人として、大阪難波吉田屋抱えの遊女を、逸名なので仮に名を八重とすると紹介しておられる。八重は宗湛にしたがって博多への旅の途中、鞆の浦で亡くなった。宗湛は沖の小島を金百貫で買ひそこに八重を葬る。小説的な美文のエピソード紹介である。そして、後世、この島を浦の人は宗湛島とも百貫島とも、今に呼んでいるそうである。という文で終わっている。

また「博多小女郎」の直前は「伊藤小左衛門」の項であるが、ここでも小左衛門の愛人として、長崎丸山の遊女貞歌を登場させておられる。刑場に曳かれる小左衛門を群集にまぎれて見送り、その翌日、貞歌は、立神の岩上から身を投げて小左衛門のあとを追ったのである。そのあとに彼女と小左衛門を弔う比翼塚が建てられていたそうだが、今はどうなっているだろう。と書かれている。博多商人たちの活躍の陰で、男たちを愛して殉じていった女たちへの弔歌なのである。

『波枕』は浄瑠璃でこそ『博多織恋鏝』という書き替えを数えるくらいだが、歌舞伎では近松以後幕末にかけて『博多織妹背唐錦』『和訓水滸伝』『千代始音頭瀬戸』『仲蔵編博多今織』『三幅対書始曾我』『博多小女郎』など多くの作品がある。現行の歌舞伎『恋湊博多諷』は明治になってからの外題である。歌舞伎が喜ばれたのは、いうまでもなく毛剃の演出に人気があったからである。手元の資料によれば、戦後これが上演されたのは松竹では十七回であるが、通しは二回しかない。つまり、中の巻「心清町」以降はわずかしが上演されていないのである。この作品

が毛剃の芝居のように思われているのも当然であろう。しかし、近松の世話物の多くがそうであるように、これもまた、女の純な愛の表現とその結果の悲劇を描くことにあつた。

明治二十五年頃、当時の九州日報の記者、今村外園によつて『柳町三娼伝』<sup>(3)</sup>という伝記が書かれたといふ。その一人に小女郎があげられている。そしてこの小女郎は海賊を代官所に密告し、惣七ともどもほつびをもらい、惣七の妻となり、柳町の近くで幸せに暮らしたという結末となつている。これは、もともと柳町の遊女たちに希望を与えようという目的で書かれたもののように、近代的社会状況のなかでの、いわば仕方のない成り行きというものもある。しかし、近松の作劇はそれをしようとしなかつた。周囲の事情でやむを得ず結末を変えた作品もなしとしないが、例外的なものにすぎない。上巻「奥田屋」での、愛するあまり心ならずも悪の道に踏み込む惣七小女郎の苦惱、中巻「心清町」での、わずかな壁の穴から親子の情愛を通わす場面、下巻幕切れの、惣七の自害とあとに残された小女郎の悲しみ。全体としてみればまさしく、報われようのない市井の悲劇を、世話物の中で書き続けた近松の、これも傑作の一つであることにちがいないのである。

以上周辺から『博多小女郎波枕』へのアプローチを試みてみた。これは、逆に言えば、『博多小女郎波枕』が周辺にどれだけの影響を与えたかの問題でもある。近松の作品の中では、それほどの作とも思われていないふしもある。少しばかりスポットを当ててみたいなのである。

註

- (1) 福岡県史通史編『博多を題材とする演劇』
- (2) 『抜け荷』山脇悌二郎 日経新書  
『博多の豪商』武野要子 ぱびるす文庫  
『悲劇の豪商伊藤小左衛門』武野要子 石風社
- (3) 『博多風俗夜話』井上精三 福岡観光叢書

文中の秋本善次郎さんについてはご遺族の秋本有子さんにいろいろお聞きしました。また貴重な資料も見せていただいた。お礼申し上げます。